

# あんげろす

復活を信じる春へ

植木 献

人間の体細胞数は約 37 兆あるらしい。しかもそれらは約半年で全部入れ替わっているという。脳細胞や神経細胞など生涯生きる細胞では分子レベルでもっとはやく入れ替わっている。つまり半年前の私はすでに死んで存在せず、今生きているのは新しい私だということになる。そうやって私たちは知らないうちに日々小さな死と再生を繰り返して命をつないでいる。

新型コロナウイルス感染症が広がって 3 年近くを耐えてきた私たちも 3 年前とはもう別の新しい身体を持って生きていると思うと、身体のみがえりを信じる信仰も荒唐無稽なものではなくなってくる。長いコロナの冬をくぐり抜け、復活の春も間近となってきた。「復活」した私たちが何をするのか、今問われている。

うえき・けん（所員）

第 90 号

2023 年 3 月



## And so, to Japan

Andrew Hamish Ion

2023 marks a half century since I first landed in Japan. In 1973, I was a Ph.D. student at the Centre of Japanese Studies at the University of Sheffield in England studying under Dr. Gordon Daniels. It was high adventure to be in Japan. My interest in Japanese history was first sparked by the very dynamic Bamba Nobuya (1937-1989), a Dôshisha, Chicago and University of California Berkeley graduate who specialized in Japanese diplomatic history, and taught Japanese history at McGill University in Montreal when I was an undergraduate there. My research interests fall into the general areas of Anglo-Japanese and Canada-Japan relations, Japanese colonial history in Korea and Taiwan, and the foreign missionary and Japanese Christian movements as an integral part of Japan's international history in the late 19th and early 20th centuries. The missionary and Japanese Christian movements have been my major research focus. The current Rutgers University Project on Rutgers and Japan in which I am a participant has brought my research back almost full circle because it was in 1971 that I began research in the William Elliot Griffis Papers at Rutgers University Library and made the link between Griffis's friend Edward Warren Clark (1849-1907), Nakamura Masanao (Keiû, 1832-1891) and Canadian Methodist missionary work in Shizuoka and Tokyo, It is an analysis of Clark in Shizuoka that I am writing for the Rutgers Project.

Fifty years ago in Tokyo, I was very fortunate to have a scholarship from the British government and letters of introduction to Japanese scholars. I am very lucky to have known many Japanese scholars who have been generous to me beyond reasonable expectations in helping my

research and in so many other ways. The accumulation of knowledge about Japan in general, and Japanese Christian history within it, depends on one's reading, and one of the many debts that I owe to Matsuzawa Hiroaki of Hôkkaidô University and ICU was his kindness in telling me what books I should be reading. This led to many expeditions to Kyobunkan in the Ginza, Iwanami Shoten and the bookstores of Jimbôchô as well as always spending plenty of money in Yûaishobô, the Christian bookstore. From going to Yûaishobô it became obvious that great attention should be paid to local church history in the study of the Japanese Christian movement for its shelves were packed with individual Church hyakunenshi. It was also clear from analyzing the British and Canadian missionary movements as Japan acquired an empire in Taiwan and Korea in the late Meiji period that careful consideration had to be given to the missionary and Christian movements in colonial Korea and Taiwan. This was because the attitudes toward Japan of British and Canadian supporters of missions were much influenced by those actions of the Japanese Government-Generals in Korea and Taiwan which adversely impacted their missions there and the Korean and Taiwanese Christian movements.

I have always found kenkyûkais, especially those at the Kiriken, most helpful in increasing my knowledge not only because of the topics discussed and the opportunity to meet people with like interests but also for their publications. The first kenkyûkai I attended back in 1974 was the Nihon Purotesutantoshi Kenkyûkai which the late Takahashi Masao chaired for many years at the Fujimichô Kyôkai in Tokyo. It was at one of their meetings in the 1990s that I was introduced to Dr. Mark R. Mullins, then teaching at Meiji Gakuin and that presaged my ongoing connection to Meiji Gakuin and

the Kiriken. The volumes of Meiji Gakuin Kiriken's *Kiyô* now in its fifty-fifth edition are an invaluable aid and source of information, so are those of Dôshisha University's Jinbun Kagaku Kenkyûjo's *Kirisutokyô shakai mondai kenkyû* which go back to the 1960s and contain many articles by great academic figures like Wada Yôichi, Dohi Akio, Sugii Mutsurô and others who did so much to mould the course of Japanese Protestant history research during the late twentieth century.

The exploration of the library and archival holdings at Meiji Gakuin, the archives at the Nihon Seikôkai Provincial Headquarters and those at Rikkyô both at the Ikebukuro and Neeza campuses, the holdings at Tokyo Joshi Daigaku, and the materials at the Yokohama Kaikô Shiryôkan and elsewhere all lay in the future when five decades ago I first set foot on Japanese soil. Yet research questions persist, what happened, for instance, to Wallace Edward Lloyd Keeling (1843-1883) and his Japanese Christian wife Blanche after they left Ebara Soroku's school in Numazu in 1874? Does anyone know?

あんどりゅー・はみっしゅ・あいおん  
(協力研究員)

## 天然詩人内村鑑三

### 一宇宙万物人生悉(ことごと)く可なりの信仰宇宙

小林 孝吉

日本近代のキリスト者・内村鑑三(1861—1930年)を「天然詩人」と呼ぶことができないだろうか。内村鑑三にとって「天然」とは、自然・宇宙観も含む、地上における「神の国」でもある。そこには無教会信仰と福音、神の言ことばを映す霊的言語の片々が響き合い、移ろいゆく信仰的宇宙——宇宙万物人生ことごと悉く可なりの世界でもある。

今年度の「オケイジョナル・ペーパー19」として、『内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌等集成——附、解題・解説、文学観、略年譜』を編纂して、改めて旧約エレミヤのような天然詩人としての内村鑑三を想った。この『集成』には、内村の自作の信仰詩21篇と、札幌農学校時代から書き留めたノート(Literary Notes)などを含む、主に英米のキリスト教詩人の「精神訳詩」と称した訳詩71篇、二つのJ(JesusとJapan)に生きた内村における和歌とキリスト教が融合した100首を超える短歌を収め、それに解題、解説を加え、近代文学に大きな影響を与えた文学観を考察し、信仰詩の発表時期を記した略年譜を付した。これまで内村鑑三研究においては、文学的領域にあたる詩、訳詩、短歌等の作品集、その解題、解説、文学観等からなる研究資料は公刊されてこなかった。それは内村鑑三の信仰に文学的側面から光をあてることにつながっていくであろう。

内村鑑三の信仰宇宙の片鱗をあらわした「天地の花なる薔薇」(『聖書之研究』54号、1904年7月)という、雑誌のページの埋め草に使われた詩がある。《其花に伴ふて刺とげあるは/其、地の産なるの証あかしなり、/其刺に伴ふて花あるは/天の之に宿るの徴しるしなり》。薔薇の鋭き刺は地の産を、美しき花は天の宿りを証する、天然宇宙の徴しるしである。

訳詩は、訳詩集『愛吟』などに見るように、ブライアント、ホイッティア、ロングフェロー、ホイットマン、ワーズワース、テニソン、ブラウニングなど数多くの米英等のキリスト教詩人の詩を、自らの信仰により翻訳、意識している。イギリスのヴィクトリア朝の詩人ロバート・ブラウニングの詩「Pippa Passes」(一節)を「万物悉く可なり」と題して、こう訳している。《年は春なり、/日は朝なり、/朝は七時なり、/山側は露に輝き、/雲雀ひばりは空に舞ひ、/蝸牛くさむらは叢林に戯る、/神は天に在り、/此世の万物可なり》(『聖書之研究』147号、1912年10月)。

また、日清戦争を「義の戦争」と論じたことを恥じて、時世の詩「寡婦の除夜」（『福音新報』78号、1896年12月）を発表した。《月清し、星白し、霜深し、夜寒し、家貧し、友尠し、歳尽て人帰らず》。以後、内村はキリスト教による非戦論、戦争絶対廃止論へと向かうのである。

主に日記に記された短歌には、内村の日々の信仰生活を垣間見ることができる。《春の日に栄の花の衣きて心うれしく帰る故郷（「妻の柩を送りて詠める」）》  
《天地も揺ぐラツパの一声に更生へるらむ春の曙》  
《彩れる榎、棕、檜、かざりなき野を覆ふ蒼穹》。孫を詠った次のような一首もある。《我が家の天の使は舞ひ去りて祖父々々御飯と呼ぶ声はなし》。

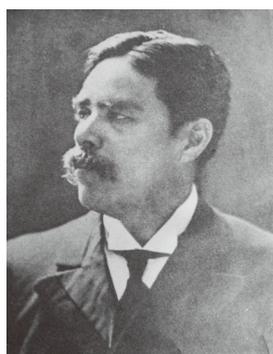
内村鑑三の福音信仰は、愛娘ルツの若き死と第一次世界大戦の歴大な死者を前に、聖書の奥義としての再臨信仰に至るのである。「我等は四人である」（『聖書之研究』139号、1912年2月）という詩がある。

《我等は四人であつた、而して今尚ほ四人である、戸籍帳簿に一人の名は消え、四角の食台の一方は空しく、四部合奏の一部は欠けて、讚美の調子は乱されしと雖も、而かも我等は今尚ほ四人である。

（略）主が再び此地に臨り給ふ時、新らしきエルサレムが天より降る時、我等は再び四人に成るのである。》

札幌農学校でのキリスト教との出会い、渡米中のアマスト大学での贖罪の回心、晩年の再臨信仰——内村鑑三の信仰の生涯は、その天然宇宙をあらわした信仰詩・訳詩・短歌等からもたどることができるのである。

こばやし・たかよし（協力研究員）



内村鑑三(1861~1930年)  
今井館教友会所蔵資料

私は大学では経済学科に入ったが、同じ学科を卒業間近であった兄の「つぶしがきく」という勧めに従っただけだった。経済学関連の授業にはあまり身が入らず、当時流行の実存哲学なるものにあこがれ、文学部の授業にもぐりに行ったりした。やがてブレーズ・パスカルの瞑想録に魅かれパスカル研究者のいる大学に転部しようかと思ひ試験準備をしなければと思った。大学紛争の時代だった。授業よりも中古車によるユーラシア大陸横断貧乏旅行や国際中高スクールでの住み込みアルバイトなどの課外活動に精出し、いつの間にか低成績で卒業していた。

しかし結果として経済学という社会科学の一分野を学ぶ機会に恵まれたことは今となってはよかつたと思う。現代世界で経済というとお金で換算できる富や豊かさの増大をどのように効率的に実現するかが中心課題で、企業も日々進化する技術が生む専門化・細分化のネットワークに対応した「人材」をますます要請するようになっていく。わたくしはこの経済なるものは行き過ぎると逆に人間を人間でなくしてしまう実存的危機を感じ、こうした経済学の中で表象される人間像を相対化し、研究することも経済学の仕事と思うようになった。

こうした仕事の中で私が近年講演会や著作で出逢ったエコノミストの一人として、シカゴ大学でも教えていた今は亡き数理経済学者の宇沢弘文がいる。ベトナム反戦活動の最中、成績のよくない学生や反戦活動にかかわっている学生を優先的に徴兵する制度に反対し、大学本部を占拠した学生たちとの調停にあたった宇沢であった<sup>1</sup>。彼によればこの反戦学生に対してビジネスマネジメント系の「資本主義と自由」（同じタイトルで同じシカゴ大のエコノミスト、ミルト

<sup>1</sup> 宇沢弘文、「人間の経済」、新潮新書、2017年

ン・フリードマン教授の本がある。邦訳は日経 BP クラシックス) というネーミングの学生集団がこん棒で襲ったりしたとのことである。荒れるキャンパスで彼は同僚とこの学生紛争の調停にあたる任を負う。これらの教員は、大学当局の事務である国への成績点を大学教員全員が付けなければ送らないで済む、という案を全学集会にかけ、学生側に受け入れられた。しかし学長は成績をつけることは教授としての雇用契約の重要な法的拘束力を持つ要件であるとして、宇沢は「あなたは今、それを破ろうとしている」と学長にいわれる。宇沢はクビになり、家族ともども路頭に迷うことになるかもしれないという不安が脳裏をかすめるが、学長は次に「だが、あなたの良心にかけての行動は、教授雇用契約の法的拘束力に優先する」と逆に励ます。この法学系学長もさることながら<sup>2</sup>、自分の専門分野とそれで得た地位保全を超えて倫理的に律する規範を優先させたこのエコノミストの勇気は驚嘆する以外にない。

彼はやがてバチカンのヨハネ・パウロ 2 世法皇に「資本主義の限界、社会主義の弊害」と題する回勅「新しい Rerum Novarum」作成のアドバイザーを依頼され、引き受ける<sup>3</sup>。彼の経済学から生まれた「社会的共通資本」がバチカンで注目されたようである。バチカンが経済体制の違いを超えて何よりも人々の命を優先させる世界秩序の在り方を世界に提示しなければならないという使命感を共有していたからだろう。

<sup>2</sup> フランス革命後に生まれた聖職者アンリ・ラコルデー (1802-1861) が革命国家の公の自由の暴走を懸念し、「強者と弱者の間で、金持ちと貧乏人の中で、主人と従僕の間で、自由は前者を抑圧し、法は後者を解放する」という名言を残したことを私は思い出す。

<sup>3</sup> 宇沢はカトリック的 conviviality (共歓) を体現していたようで、お酒が大好きだったと述懐している。帰国後、私のエコノミストの友人が勤務していた新潟大学経済学部に来られた時、この同僚によれば、夕刻よく経済学部の教員をさそってビール (研究室にはカートンが積まれていた) をふるまっていたとのことである。本書でも、ヨハネ・パウロ 2 世の部屋で出された法王庁ブランドワインを飲みすぎ、法皇の前で自説を展開し、法皇ももっとはっきり主張せよと開陳した際、法皇から「私に説教したのはあなたが初めてだ」と言われた (前掲書 24 ページ)。

ウクライナ戦争が泥沼化し、双方は勝つために戦車や、大砲や、兵隊を国際支援やマーケットで手に入れるかという戦争続行の手段調達活動で追われた一年であった。倫理的に許されない殺し合いをどう避けるかという根本的な課題のために人類が世界各地の苦い経験から積み重ねてきた平和を維持し、知的遺産・共通財産を活用していくことがかすんでしまっている。

「われらの一生のうちに二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い」の前文で始まる国連憲章、「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有すること」を謳った日本国憲法、そしてバチカンの「回勅」、この3つの世界秩序の規範は経済学という一学問分野を律する真理の追求を超える上位規範であるべきと社会科学の学徒 (scholar) の一人である私は願う。

かつまた・まこと (協力研究員)

## 雑録

本号の表紙文で植木献所員も綴るように、春が間近に迫ってきた。季節は毎年めぐるとしても、長い新型コロナ禍を経た今年の春は、昨年、一昨年とは異なる変化が訪れる。記録のために書いておくと、3月13日からはマスク着用が屋内外ともに任意となる。5月8日からは感染症としての取り扱いが、現状の2類相当から季節性インフルエンザと同じ5類に変わる。

もちろん取り扱いが変わったからと言って、ただちに重症化や致死の可能性がなくなるわけではない。しかしすっかり定着した三密回避のマスク生活は、大きな転機を迎えることになる。大学の新生は高校三年間で馴染んだマスクをしばらく手放さないだろうか。あるいは高校とは環境が変わるこのタイミングで、心機一転、周囲

の様子をみながらも早期に外すだろうか。そんなことを考えるのが今年の春である。

過去三年間で、感染症やそれに関連する原因により多くの命が失われた。そして続く戦争は人々の安心や希望を蔑ろにし、不安と絶望を生産してやまない。

そのような中で、前を向くにはどうしたら良いか。思い出すのは三好達治が1946年の年頭に物した「涙をぬぐって働かう」という詩である。詩は冒頭から「みんなで希望をとりもどして涙をぬぐって働かう／忘れがたい悲しみは忘れがたいままにしておかう／苦しい心は苦しいままに／けれどもその心を今日は一たび寛がう／みんな元気を取りもどして涙をぬぐって働かう」と続く。

戦時下において多くの戦争詩を綴った三好が、戦後ただちに復興の詩に転じたことについて、戦争責任論の観点から批判がなされたことも少なくない。私もそのような文脈で紹介することのある詩であるが、月並みな物言いながら、詩の力というべきか、厄災から立ちあがろうとする時期に目にすると、つい心を動かされる。

この詩の後半で遠望するのは春である。2023年の春はもう間近に迫った。この詩のように「忘れがたい悲しみは忘れがたいまま」としておこう。あるいは呼びかける「みんな」が、全く予期せず、明日には思っていた「みんな」ではなくなるかもしれない。それでも春を望み、手を取りあいながら進むしかない。それこそが希望というものであろう。

春は旅立ちと出会いの季節でもある。2022年度末をもって当研究所の客員研究員の任期満了を迎える工藤万里江さん、村上志保さんには、2年のあいだ当研究所の研究活動に大いにご貢献いただいた。そして教学補佐の高橋英里さんには、5年間の長きにわたり、研究所の運営業務を支えていただいた。心からの感謝をお伝えしたい。

旅立ちを言祝ぎ、新たな出会いに恵まれるこの春も、引き続き研究所の運営と充実化に尽力する所存である。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究所活動（2022年12月～2023年3月）

共催イベント 【PRIME 主催連続セミナー】

<市民的不服従>を通して平和を考える

第3回 「指紋押捺拒否」が開いた扉

開催日時：2022年12月16日（金）17：00～19：00

開催場所：白金校舎 本館2階 1254教室

（Zoomを用いてのハイブリッド開催）

講師：崔善愛氏（ピアニスト、週刊金曜日編集委員、本研究所協力研究員）

キリスト教研究所 公開講演会

「翻訳は癒やす

——トーマス・レーマー『ヤバい神』刊行の舞台裏」

開催日時：2023年3月25日（土）14:00-16:00

開催方法：Zoomを用いて対面とのハイブリッド開催

会場：白金校舎 本館4階 1405教室

講師：白田浩一氏（日本キリスト教団出版局）

中国近現代キリスト教研究プロジェクト研究会

<第4回>

発表者：土肥 歩 協力研究員

テーマ：

「清末広西の壬寅奇災と在華プロテスタント宣教師」

開催日時：2023年1月27日（金）19:00～21:00

※Zoomを用いてオンラインにて開催

キリスト教文化・芸術研究プロジェクト主催公開研究会

「音楽による神の愛の表現 第5回」

開催日時：2023年3月18日（土）14:00-16:30

開催方法：対面とオンラインのハイブリッド開催

（会場：明治学院大学 本館9階 92会議室）

発表：

近松 博郎（協力研究員）

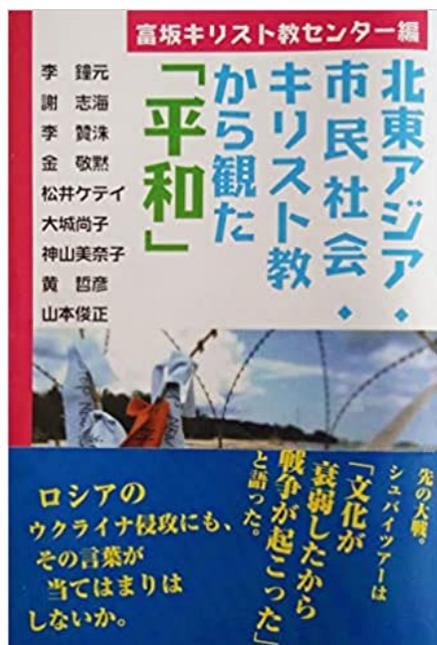
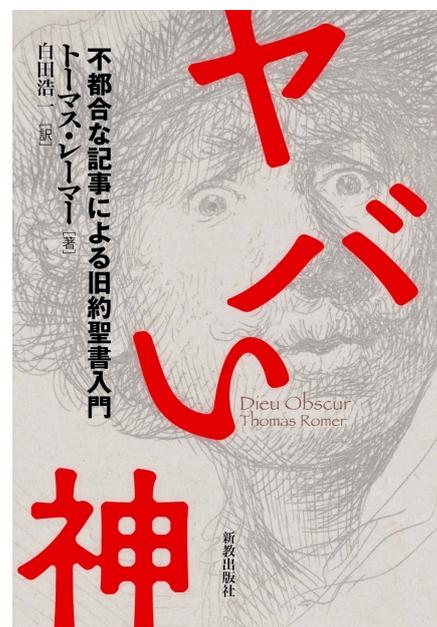
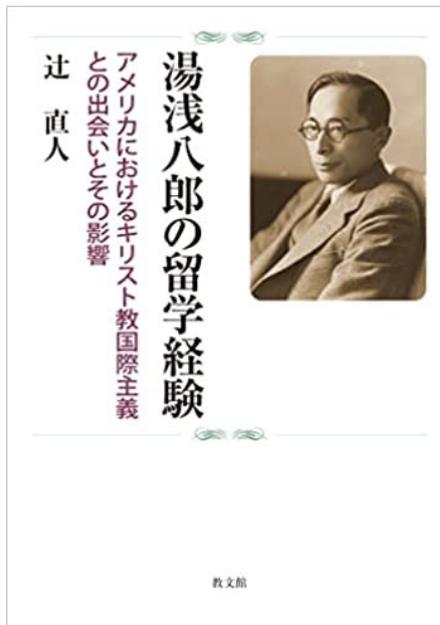
「J. S. バッハの初期作品再考——先人作曲家からの影響に関する近年の研究をもとに——」

加藤 拓未（協力研究員・司会兼任）

「ラインハルト・カイザーの《フーノルト受難曲》(1705)と《ブロッケス受難曲》(1712)——台本の比較分析(その3:最終回)」

#### 新着図書

- ・「福音と世界」No. 1、新教出版社、2023。
- ・「福音と世界」No. 2、新教出版社、2023。
- ・「福音と世界」No. 3、新教出版社、2023。
- ・『1. Maccabees』DANIEL R. SCHWARTZ 著、Yale University Press、2022年。
- ・『湯浅八郎の留学経験——アメリカにおけるキリスト教国際主義との出会いとその影響』辻直人著、教文館、2023年。(辻直人先生ご寄贈)
- ・『ヤバい神 不都合な記事による旧約聖書入門』トーマス・レーマー著、白田浩一訳、新教出版社、2022年。
- ・『横浜海岸教会 150年史』横浜海岸教会 150年史編さん委員会編、日本キリスト教会横浜海岸教会、2022年。(岡部一興先生ご寄贈)
- ☆以下、岡田仁先生ご寄贈
- ・『いのちにつながるコミュニケーション——和解の祝福を生きる』富坂キリスト教センター編、いのちのことば社、2021年。
- ・『奪われる子どもたち——貧困から考える子どもの権利の話』富坂キリスト教センター編、教文館、2020年。
- ・『行き詰まりの先にあるもの』富坂キリスト教センター編、いのちのことば社、2014年。
- ・『協力と抵抗の内面史 戦時下を生きたキリスト者たちの研究』富坂キリスト教センター編、新教出版社、2019年。
- ・『原発と宗教——未来世代への責任』富坂キリスト教センター編、いのちのことば社、2016年。
- ・『北東アジア・市民社会・キリスト教から見た「平和」』富坂キリスト教センター編、燦葉出版社、2022年。
- ・『沖縄にみる性暴力と軍事主義』富坂キリスト教センター編、御茶の水書房、2017年。



---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第90号

---

2023年3月28日 発行

明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37  
TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214  
Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩